



特攻

第7号

〒102 (新)
 東京都千代田区九段南
 4-3-7 40倍行社内
 特攻隊慰霊顕彰会
 特攻平和観音奉賛会
 電話 03 (263) 0851
 編集人 最上 貞雄
 発行人

謹んで
 昭和天皇の崩御を
 お悔み申し上げます

悠久の大義に散華した特攻魂を讃える

特攻隊慰霊顕彰会

副会長 寺崎 隆 治

古来わが国には国難に際し身命を皇
 国に捧げる忠勇義烈の歴史、伝統があ
 る。

中臣鎌足が皇位を狙う蘇我入鹿を誅
 し、和氣清麻呂が道鏡を退ぞけ、楠木

正成、正行父子の湊川、及び四条畷の
 忠死、近くは日露戦争時旅順口閉塞の

決死隊、旅順突入の白樺隊、第一次上
 海事変時の爆弾三勇士などこれであ
 り、藤田東湖は「正氣時に光を放つ」
 といわれた。

と

第二次世界大戦において、英国には

二人乗りの豆潜水艦をもって、ノルウ

エー沿岸の入江に碇泊のドイツ豆戦艦

を撃沈しようと計画したり、イタリ

アの海軍が、人間魚雷をもってジブラ

タル軍港に潜入、英国の油槽船テン

ビール及び、貨物船を小破したり、エ

ジプトのアレキサンドリア軍港に潜

入して、英国戦艦ヴァリアン、クイン

・エリザベスの艦底を爆破し軽微の損

傷を与えたことなどがあるが、これら

は潜水艦で運ばれた二人乗りの魚雷を

港外から発進し、その頭部を留め金で

敵艦の艦底に装着、または、浮袋につ
 けた爆弾を背負って港内にもぐり込

み、これを敵の艦底にとりつけ、時限
 信管で爆破する程度のもので、乗員は
 港外にもぐり出し潜水艦に救助される
 か、捕虜となる約束で行われたにすぎ
 なかった。

これに対し大東亜戦争におけるわが
 陸海軍の特攻作戦は、開戦劈頭の特殊
 潜航艇の真珠湾攻撃をはじめ、同艇の
 シドニー軍港、デイエゴ・スワレス軍
 港（マダガスカル島）攻撃、回天（人
 間魚雷）のウルシー環礁（サイパンの
 西方一二〇哩の米艦隊泊地）攻撃、フ

イリピン東方海面における重巡インデ
 アナポリス撃沈（広島、長崎におとし
 た原爆をサンフランシスコからサイパ
 ン近くのテナアン島に運搬した米艦）

更にフィリピン、硫黄島、沖縄作戦に
 おける陸海軍航空機の大規模の特攻作
 戦をはじめ、震洋艇、特攻艇、魚雷

艇、蛟竜（豆潜水艦）、義烈空挺隊によ
 る撃沈破及び空挺、戦車特攻による滅

没という大戦果（米軍公表）をあげ
 た。わが戦死者、航空特攻隊海軍併せ

て三、九一三名、その他の特攻戦死者
 約二、〇〇〇名合計約六千名に達し
 た。更に本土決戦に対し約五、五〇〇

機の陸海軍特攻機、震洋艇六、二〇〇隻、①特攻艇八、〇〇〇隻、海竜(豆潜水艦)二〇七隻、伏竜(人間機雷)六〇〇個(五〇大隊)を本土各要所に配備し、敵の上陸に備えた。敵がわが特攻作戦による大出血を恐れ、昭和二十年七月二十六日ポツダム宣言を日本につきつけ、降伏を勧告したが、わが政府はこれを黙殺したため、八月六日広島、同九日長崎に残虐なる原爆を投下、ソ連は八日、日ソ中立条約を一方的に破棄し、満洲に侵攻したため、わが政府は天皇陛下の御決断により終戦を決議、八月十五日終戦を迎えたのであります。

ご承知のように特攻隊員は、年齢十六歳から二十歳代の前途有為の若ものであり、皇国の危急存亡に際し全く生還を期せず、進んで身命を捧げようとしたものであり、回天の如きは、二十二歳の黒木博司海軍大尉、二十歳の仁科関夫中尉の兩人が精魂を込めて開発、海軍大臣に血書をもって歎願、実現したものであります。特攻隊員は、誠忠にして、父母に孝、兄弟姉妹に対する情愛がよく表現されており、その真相は歴史家、平泉澄博士の「少年日本史」や第六艦隊特攻参謀鳥巢建之助中佐の「回天」に詳記してあります。

終戦直後、わが陸、海、外務代表参謀次長河辺虎四郎陸軍中将及び随員十

三名がマニラのマッカーサー司令部に派遣された時、サザランド参謀長は、開口一番「回天はまだ海上に残っているか」ときかれた。「回天を積んだ潜水艦がまだ七隻残っている」と答えたところ、「それは大変だ、即刻降伏するよう伝えよ」といわれ、また八月二十六日マ元帥一行が厚木飛行場に到着する迄に「航空隊員その他軍隊は悉く復員せよ」と強く要求された。如何に米軍が日本の特攻攻撃に対し戦慄の恐怖をもっていたかがわかる。

終戦後一時、米国民は日本の特攻に対し自殺的気狂い行為であると非難していたが、その後の実情調査や豪州の戦史研究家デニス・ウォーナー夫妻著の「神風」(特攻作戦の全貌)等によりその真相がわかり、多大の敬意を表している。

シドニー軍港司令官ムアヘッド・グールド海軍少将はシドニー攻撃の特攻戦死者松尾大尉以下四名に対し騎士道精神をもって海軍礼式による丁重な葬儀を執行、交換船鎌倉丸でその遺骨、遺品を横浜港に送ってくれた。

豪州の首都キャンベラの戦争博物館には、引き揚げた特殊潜航艇を大切に陳列、参観の青少年に一番感銘を与えていると、数年前、私が訪問したとき館長が話してくれた。

終戦後、日本の歴史家、徳富蘇峯は

日本の復興には百年を要するだろうといわれた。チャーチルは昂然として「日本は連合国の占領政策により、こつぱみじんに打ち砕かれ、一世紀ぐらいは立上ることは出来ないであろう」と放言した。

ところが廢墟と化した日本は終戦後四十年にして自由陣営において経済力第二位といわれるほど発展するに至った。

その原動力は何か。私は二千六百年も連綿として継統の万世一系の天皇制でありその皇国に身命を捧げた英霊、特に特攻隊英霊の賜ものであると確信いたします。

国難に際し生還を期せず、これに殉ずる特攻魂と、国民の勤勉努力がその原動力であると信じます。もちろん日米安保条約により防衛力をGNPの1%程度に抑え、先端技術と良質の資源を米国その他から輸入し、優秀なる工業製品を輸出したり、朝鮮戦争、米ソ対立、世界情勢の変化など天運、我れに与したことも大きな原因であると思えます。

しかし乍ら戦後、民主主義、自由、人權等が氾濫し愛国心、道義心が著しく低下し金儲けのためなら機密の工作機械や浮ドックをソ連に輸出するなど国益を顧みないことは信を内外に失墜し甚だ遺憾であります。

終戦後四十三年、わが国は自国の防衛を日米安保条約に依存し輸出の三八%を米国に仰ぎ、平和と繁栄を維持してきたが、今日米国は世界最大の債務国となり赤字が累積し、建て直しは、貯蓄、増税、予算(特に軍事費)の削減、貿易の拡大の四つによるほかはなく、しかも大統領選挙その他の事情により、実現は極めて困難である。今こそ黒字国日本は、米国の恩に報ゆるため内需、輸入の拡大、防衛力の補充など積極的に協力し、共存共栄を図るべきであります。

なお大東亜戦争においてわが陸海軍が六千名という多数の特攻生霊を捧げたことは諸外国に対し、一旦緩急の場合、日本国民は恐るべき闘魂を発揮する潜在力を持つ国と認識され、戦争の抑止力、即ち平和に貢献するものと確信いたします。

もちろん、精強なる自衛軍を保有し、治に居て乱を忘れざるの備えが、最も肝要であります。

特攻隊慰霊顕彰会発足以来、約十年竹田恒徳会長の下に旧陸海軍会員渾然一体となり、一昨62年、靖國神社遊就館に特攻隊の頌、特攻像、レリーフ、各種模型、写真、遺品等を奉納し、世田谷特攻観音に特攻隊の頌を奉納、また毎年三月下旬の日曜日に靖國神社、九月二十三日に世田谷観音においてこ

遺族、戦友、来賓の参列を得て特攻隊
顕彰の式典を執行していることは、慶
賀に堪えません。

今後は更に特攻隊員名簿の作製、歴
史、パンフレットの刊行、資料の集収
等に一層努力せねばならないと思いま
す。

過去一年間における遊就館参観者
は、約十八万人(毎日平均約五百人)
特に青少年に多大の感銘を与えている

第37回特攻平和観音

年次法要

63年9月23日世田谷山観音寺特攻平
和観音堂に於て浅草寺貫首守山良順大
僧正祝下以下式衆御一同により厳肅莊
厳に法要が執り行はれた。

竹田会長の莊重なる祭文奏上につづ
いて、遺族を代表して岡山よし子さん
より左記の様な追悼のことが切々と
述べられ、四〇〇名に及ぶ参列者の感
涙を呼んだ。

追悼のことは

遺族代表 第81振武隊 岡山 勝実

妹 岡山よし子

初秋の風さわやかな緑濃い特攻平和
観音にぬかずき、第81振武隊岡山勝実
の妹として大変僭越でございますが、

とのことでありました。

政府も近來、国民の愛国心、道義心
低下の現状に鑑み近く、小、中、高校
の社会科教科書を歴史、地理、外国史
に改め、道徳教育を強化し、真の日本
人造りに乗りだすことになりました。

内外多難の今こそ、悠久の大義に身
命を捧げ後に続くものに期待し散華し
た、特攻隊の精神を発揚すべきときと
思います。

ご遺族皆様方に代り特攻英霊につつま
んで追悼のことは捧げます。

兄勝実は熊谷陸軍飛行学校にて操縦
学生の教育を受け卒業後戦闘機乗りと
して技を磨き、飛行学校にて後輩の指

導に当っておりましたが、戦局急迫し
祖国まさに危急存亡を迎えた時、昭和
20年3月特別攻撃隊の命を受け、第81
振武隊に配属となり、親兄弟姉妹への
愛着をも断ち切り、4月22日沖繩にて
決然として敵艦に体当たり攻撃を敢行し
散華しました。

兄勝実はとても親兄弟姉妹思いの優
しい兄でした。子供の頃魚取りが得意
で大きな籠を持って何時も銀色に輝く
小魚を捕りその魚に「ブンゾウ」と名
付けて居りました。戦後病で床につい
た父が「ブンゾウは桜島の海から消え
てしまった。勝実が特攻の時一緒に持
っていったってしまった。」とポツリと語
り、其の夜父は兄を追うように息を引
きとりましたのも不思議な思い出にな
りました。

英霊が全身全霊を捧げられた祖国日
本はいまや英霊のご加護により空前の
復興発展を遂げましたが、今後の日本
は厳しい世界の環境の中で楽観を許し
ません。

私ども遺族は心の中の思い出を大切
にし、若い生命を惜げなく祖国に捧げ
られた青年達の姿を語りついで、これ
からも平和な日本を守り育て、英霊の
ご遺志にお応えいたす覚悟でございま
す。

御霊よ、安らかにお眠り下さい。

奇蹟の生還

柴田信也氏の遺稿より

柴田氏は特操一期の出身で、昭
和20年4月10日第29振武隊長とし
て知覧より出撃したが、エンジン
故障で黒島に不時着、機体は大破
炎上、自身も全身に大火傷を負っ
たが、奇蹟的に生還、戦後は戦没
特攻隊員の慰霊顕彰に一身を捧げ
ておられたが、惜しくも昭和63年
4月2日逝去された。

特攻隊員志願の情況とその心情
がよく表現されているので、彼の
遺稿の一部を掲載する次第です。

合掌

故 柴 田 信 也

(当時第29振武隊・陸軍少尉)

志願するものは一歩前へ!

それは残暑のきびしい日であった。

例のごとく朝はやくから飛行演習にで
て、慣熟飛行のため一人一人飛び立
ち、ようやく一通りの演習が終わった
ときのことであった。

あまり顔をみせない津崎隊長が、
先任将校をしたがえてやってきた。

演習後整列を終えて、いつもならば
批評がおこなわれるのであるが、戦隊



長が訓辞をあたえる姿勢をとって、い
る。何か話があるなと思つたものの、
どうせあまり上手でない予備役の学生
あがりのわれわれに、叱責でもくわえ
るのではないかと予想した。

ところが戦隊長はおもむろに、さい
きんの戦局のきびしさを説明し、
「さて、そこで今回わが軍は、開戦
当初の特殊潜航艇のような特別の攻撃
方法を考えている。出てはふたたび還
らぬ戦法である。従つて決死を覚悟で
せねばならぬが、このような作戦に参
加を希望するものはいないか。ただい
まより三十分の考える時間をあたえる
から、よく考えて申し出よ」

と、いって、いちおう隊列を解いた。
戦隊長のいう特殊潜航艇のような攻
撃法といえは体当たりである。われわ
れは操縦士であるから、体当たりをす
れば飛行機ごと敵にぶつかることにな
る、という所までは考えたが、それ以
上はどうやるのか、どのような方法
で、また、どこで、何時やるのかもわ
からなかった。

戦友を見渡したが皆は黙して語ら
ず、それぞれの姿勢で、それぞれの考
えにふけているように見うけられ
た。立って向山の空を眺めているも
の、芝生にすわつてじっと目をとじて
いるもの、またやけに動きまわつて
いるもの……。

どうせ飛行機乗りになれば必ず死ぬ
であろうし、また世はまさに戦時であ
る。あえて飛行機乗りでなくとも戦地
に行けば、死と直面することはわか
りきつていると考えれば、その待つ時
間は私にはながくも感じたし、また早く
願ひ出てさっぱりしたいと思つた。
しかし、それ以上に気になることは、
果たして何人がこの作戦に参加を申し
出るであろうかということであつた。

日差しが強い飛行場の真ん中は非常
な暑さであつたことは記憶にあるが、
それも忘れて考えこんでいた。

「あつまれ」の号令で、各自はやつ
とわれにかえつて二列横隊に整列した
が、皆はそれぞれ白けきつた空気のな
かを、いつものようにかけ足で列を組
んだ。

隊長は整列し終わったわれわれを一
通り見渡しして一声高く、

「志願するものは一歩前へ！」

と叫んだ。この声が終わるか終わら
ぬうちに「ドッ」という足音を残し
て、いっせいに全員が一歩前進したの
であつた。考えてみれば全員それぞれ
視角の中で前後左右の動きをみて、
「ああ戦友たちはみな一歩前進する
な」と察知していたのではなかつたろ
うか。

全員志願ということを確認してはじ
めて隊長は、

「よくわかつた。貴様たちの命はあ
ずかつた。おつて命令が出るまで待機
しろ。解散！」

というたさつと引き揚げて行つたの
である。残されたわれわれは誰一人声
をだす者もなく、隊舎に帰つたのであ
るが、それからの毎日の激しい訓練
に、あらためてそれを考える余裕さえ
なかつた。

ということとは、それからのちの十一
月末に戦隊がフィリピンに転出し、わ
れわれ特操のみ十余名が転属命令を受
領し、明野飛行学校の隊舎に入り、ベ
ッドを指定されるまでは本当に忘れて
いたことであつた。

ここにあってベッドを指定されて初
めてわかつたということは、読者諸氏
には奇異に感じるかもしれないが、私に
はこのベッドの主とは奇しき縁があつ
たのである。

ベッドの主の白石少尉はやはり特操
一期で、私が中学を終えて福岡の予備
校に通い、浪人生活を送つて、いたと
き、おなじ下宿にいた友である。彼は
その後医専に入ったので、医者になつ
たものとばかり思つていたが、われわ
れが明野に転属するため移動中、電車
のなかで新聞に大きくその活躍が掲載
されていた特別攻撃隊靖国隊の一員で
あつたことである。

ここ四、五年あわなかつた白石君の

名を聞いたのは、新聞紙上での戦死の
発表であり、私が指定されたベッド
は、彼が内地を立つまで寝ていた彼の
ベッドだったのだ。このベッドをみ
て、はじめて特殊潜航艇のような体当
たりというのが特攻隊であつたという
ことを知り、あの残暑のなかで考えさ
せられ、志願したものが白石と同じ特
攻隊であつたとは、その時はじめて気
がついたのである。

国を思う心

—小泉信三 講演集より—その一

二瓶英二郎

前 言

慶応義塾大学塾長であられた、小泉
信三先生が「戦争遺児の皆さんへ」と
説かれた前言を要約いたしますと、戦
死者の遺児である皆さんに対し、私も
遺族の一人としてお話ししたいと思います。
私事になりますが、私の件は慶応
義塾を出て、或る銀行に奉職していま
したが、志願して海軍の主計士官とな
り、昭和十七年の十月、南太平洋方面
の海上戦闘で戦死しました。年は二十
五でした。もし彼れが今少し年長であ
つたか、または早く結婚してしまつた
ら、子供を跡にのこしたかも知れず、
そうすれば私も、遺児の祖父としてそ

の世話をしなければならなかったかも知れませんが、皆さんは父を失い、私は子を失ったという違いはありますけれども、戦争で肉親を失った痛みは、多分変わるまいと思いません、死んだ児の年を数えるのは未練なこととされて居ますが、私自身愚痴ボイ話しは大ざらいですが、事実たまに、生きていけば幾つだろうと思うことはあり、従って、皆さんが亡きお父さんのことを思われる心情は、私に分るように思っています。

日本人の日本

吾々の住むこの世界は、多くの国に分かれています。国々には国境があり、国境の内に住む人民は国民と呼ばれ、一つの政府をいただき多くの場合、一つの国語を話し、風俗習慣を同じくし、共同の歴史を背後に持ち、たとえば、同じ舟に乗り組んだものが、一緒に波や風を凌いで来たように、長い間、苦楽安危を共にして今日に至ったものであります。

大きな森の一つ一つの樹を観れば、若木もあり、老樹もあり、芽生えてこれから育つものも、朽ちて倒れるもの

もあって、様々ですが、その個々の樹に拘らず、森そのものは何時もそこに在って変りません。それと同じように、国民というものも、それを成す一人一人の個人を見れば、老人もあり、少年小児もあり、老人が老いてやがて枯れ死ぬ傍らに、続々新しい子供は生まれ、成長して、少年は青年、青年は壮年となり、一人一人の生き死にとは別に、一の国民というものは、永く変らぬ生命を持つのです。そうして皆さんも吾々も、共に吾が日本国民に、ただに不朽の生命を持たせるだけでなく、益々強い、健全な生命をそれに吹き込みたいと、切に願っている次第です。

この点について、吾々日本国民は一の幸福に恵まれているといえます。それは、この日本の島々には日本人だけが住んでいるということですが、これは一見ごく当り前のことのようにですが、広い世界を見れば、言語も皮膚の色も違ふ幾つかの人種が寄り合つて、一つの国をなし、互いの間の利害も感情も同じでないため、一つの国民が完全な一体を成していない例は、沢山あります。ロシアや、インドやシナはそれだといえましょう。また、イタリヤ東北境のトリエステ、仏独の境のザール、ドイツとポーランドとの間のダンチヒ等では、異った民族が相接し、相

混じて住むために摩擦や衝突が起り、現に第二次大戦が、ダンチヒ問題を導火として起つたことは、皆さんも御承知のことであらうと思ひます。

それを考えると、四方海に囲まれてゐるために、隣国と境を接する面倒がなく、また国内には異民族というものがなくて、日本人が日本人とのみ共に住み得るということがいかに大きい幸いであるかが分ると思ひます。勿論、日本のこの島々の上に八千数百万人の同胞が住むことは、随分窮屈で、決して楽なことではありませんけれども、しかし、この日本の国土は、日本人のものであり、日本人のみのものであるということとは、吾々にとつて真に張り合いのあることであります。吾々はこの国土を祖先から受け継いで、これを子孫に伝えるのでありますが、吾々の吾々にこの国土を伝えるものも、吾々からそれを受け継ぐものも、共に皆な同じ日本語を語り、同じ心で国旗を仰ぐ日本人であるのは、仕合せなことではありませんか。

う意味で、顔は自分で造るものだ、だから自分に責任がある、というのです。これは味うべき言葉で、英雄偉人といわれないまでも、一芸に達した人、一事業を成し遂げた人の顔というものは、気品とか、威厳とか、力とか、魅力とか、内の何物かを現していることは、皆さんも御気づきのことと思ひます。森鷗外も、或る時、人間生れたままの顔をもって死ぬのは恥すべきことだといひました。これも全く同じ意味であります。

私は、この鷗外の言葉を、しばらく借りたいと思ひます。鷗外は、人間生れたままの顔で死ぬのは恥すべきことだといひましたが、同じような意味に於て、吾々は祖先から受け継いだ日本の国土を、ただそのまま次ぎの世代に引き渡すのを恥すべきだと思ひます。吾々は必ず吾々の受け継いだよりも、それをよきものとして、子孫にのこすことを期すべきだと思ひます。国土は自然によって与えられたままのものでなく、長い年月の間に吾々の祖先が手を加えて造つて吾々に伝えたものです。勿論、日本の島々というものは、

同胞・祖先・子孫に対する義務

アメリカ人の尊敬するエブラハム・リンカンが或る時、人間四十以上の人間の顔は、父母に与えられたままのものではなく、内に磨かれ、或は鍛えられた心を外に現すものである。そうい

自然によって造られたものですが、それを今あるような国土としたのは、人間の力です。土地の開墾改良や、道路運河の開通、港湾の設備、河川の改修、ダム、築造等々の、ごく手近の例

を見ても、今吾々が住み、その上に吾々が生きてゐる日本の国土というものは、決して与えられたままのものではなくて、日本人によって造られたものだとはいわなければなりません。そうだとすれば、吾々以前の日本人によって造られたものの恩恵に浴するように、吾々も又た吾々の子孫に、吾々の造つたもの、若しくは付け加えたものの恩恵を与えなければなりません。それをしないのは恥ずべきことで、それは生れたままの顔で死ぬのが恥ずべきであらう。

右には仮りに土地とか河川とか、日につき易い項目を並べましたが、無形の文化についても同様です。宗教道徳学問芸術の凡てを包む日本の文化というものは、吾々はそれを祖先から受けて子孫に伝えるのでありますが、受けたそのままを伝えるのではなく、常に何物かを「望むらくは多くのものを」それに付け加え、よりよいもの、より高い、大きいものにして、次ぎの時代に伝えることを期すべきであります。それが出来ないということは、やはり生まれたままの顔で死ぬのと同じだといえましよう。

日本国民ということをご考えて来ると、今日現在日本に住んでゐるもののみが日本人でないということが、特

に感じられます。吾々の祖先も日本人であり、吾々の子孫も日本人である。日本国民というものは、少しむづかしいかと、この国土という空間に、過去、現在、未来という時間を通じて生きてゐるものだということが出来ましよう。そこで自然に、吾々は、国民として現在(同胞)と過去(祖先)と未来(子孫)に対する義務を感ずることになるのです。

知覧石灯籠の奉納について

最上事務局長

知覧特攻平和観音参道の石灯籠奉納に対し多数の方々よりご協力を頂きまして感謝に耐えません。

尚二万円未満の方々のご芳志は写真の様な大石灯籠(高さ5m50、費用三〇〇万円)を寄贈し、その費用の一部に充当させていただきます。ご了承くださいのでご了承賜りたいと存じます。

奉納者名 (申込順、略敬称)

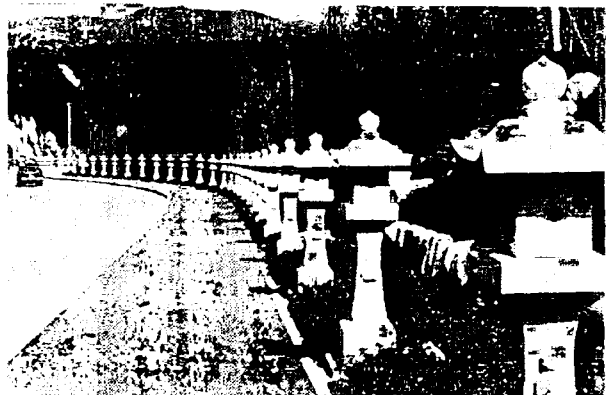
10万円以上

義烈空挺隊顕彰会、瀬島竜三、第百飛行団、少候22期生会、小池竜二、三小田五雄、谷口正幸、服部利三郎、白田智子、上堀昌彰、宮本林泰、杉本和子、近岡治雄、菅原道照、航空同人会及航空碑奉賛会、振武83隊、阿部喜一、上津宗範、特操二期生会、真田武夫他3名、飛行60戦隊会、宮前ケイ子他3名、腰塚守正他5名、川口周子他4名、渡

辺博厚他4名、長谷川昭二他1名、太飛会、水田昭雄、飛行29戦隊会、山本忠、特操二期小室治郎、熊本備行会、陸士58期生会、2万円以上

野崎真澄、岸本茂次郎、秋山紋次郎、坂橋安、沢井光二、尾川寿、田島滋人、森王子郎、田中耕二、渡部あい、桑原泰郎、松本利夫、本間忠、柴田信也、宮永笑子、高山雷蔵、楨文二、長内謙治、東井伍郎、村松文一、木梨惟貞、小野三三、宮久保達夫、中村昭典、大場軍勝、佐々木沢人、戸田光雄、池崎吉蔵、田中寛、川崎勝也、国枝春夫、坂口義春、小島邦三、橋本祐義、梁川英典、長田正春、北浦尊福、萩野重幸、河本幸吾、長坂時男、赤星光雄、向井嘉太郎、牧範、森川高明、峰山庸文、最上貞雄、辺見重孝、小此木敏夫、佐藤源治郎、堀直之、金原漢生、広川治二、松田千秋、陸士34期生会九州支隊、米田典夫、津山竜次郎

この他多数の方々よりご芳志を賜りま



したが、2万円未満の方のご芳名は恐縮ながら省略させていただきました。

幻の特攻隊

—手記「わが青春に

悔いなし」より—

根元 正平(54期)

昭和十九年の夏、当時私達は中国に於いて、在支米空軍(日本本土空襲部隊)と連日熾烈な戦闘を続けており、自爆、未帰還等わが方の損害もあなどれない程であった。

丁度その頃、米軍は沖縄、台湾周辺に機動艦隊を近づけ上陸の気配濃厚で、これに備え我々陸軍航空部隊にも艦船攻撃の態勢を整うべしという内示があり、わが飛行戦隊も作戦のかたわら、艦船攻撃訓練に入ったわけである。

私たちは命が惜しいのではなく、どうせ、わたしたちの寿命はあと二、三カ月だ。……何とか十二分の戦果を上げ、立派に任務を達成する方法はないかと、私は作戦の時も、訓練の時も常にその事が頭から離れなかったのである。そして頭に浮かんで来たのは……飛行機もろとも、爆弾をかかえ込んだまま敵艦船に体当りをする事だ、という結論に達した。

体当り攻撃なら百発百中だ、我々一度は死ぬ身なのだ。どうせ死ぬのなら偉大なる戦果を上げて世間をアツといわせよう。

それで私はこの体当り攻撃隊編成のため着々準備を進めておいた。なかなか部下操縦者の同意を得なければならぬ。いくら隊長がその気持になっても、一人の人間の生命を絶つ仕事なので、そう軽々しく行われるものでもない。それである晩、部下操縦者全員を私の部屋に集め、次のような話をし、みな同意を求めたのである。

「諸君も感じておるように中国大陸における、或いは南方戦線における航空戦の現況は、われわれの奮闘にもかかわらず、目を追って悪化している。米機動艦隊は、台湾、沖縄のみならず、わが本土周辺にまで出沒している。そこでこの度、わが戦隊に対して艦船攻撃のための訓練命令が内示された。ご承知の通り艦船攻撃というものは、陸上目標と違い、そう簡単なものではない。肉を切らせて骨を切るの戦法でなければ完全に任務を遂行することは困難である。そこで私は、この艦船攻撃は体当り攻撃以外には方法はないという結論に達し、わが中隊を以てこの体当り部隊を編成しよう」と決心したのである。それには君たち操縦者の同意が必要であり、若し不幸にして皆の同意が得られなければ、隊長一人でも決行する覚悟である。われわれの残された寿命はしれたものだ。どうせ死ぬんだつたなら、男一匹世間をアツ

といわせるような死に方をしようではないか。どうか今晩一晩、じっくり考えて明朝まで返事をして貰いたい」と。その結果、操縦者のほとんど(全員ではなかった)が心良く賛同してくれたので、私は数日後、戦隊長を通し、軍司令官に対し体当り部隊編成のための意見具申をしたのである。

軍司令官は「君の気持はよく分る、然し君達の生命をあずかる責任者としてそう軽々しく君の意見に賛同し、許可するわけにはいかない。ましてや現在我々が直面している戦況は、そこまで深刻になっていない。そういう気持を起ささないで(やけくそになるな)意か?」現在の任務に邁進してもらいたい」と。然し私の気持は固っており、若し艦船攻撃の命令があった場合は、私ひとりでも決行して見せると、内心決意をしておいたのである。

それから数カ月、海軍では関行雄大尉が比島に於て神風特攻隊なるものを編成し、また陸軍に於ても、先般、私の部隊から銚田飛行学校(教導飛行団)に転出された岩本益臣大尉(53期)が「陸軍特別攻撃隊万朵隊」を編成し、着々その準備をしておいたのである。そして海軍が比島で、また内地で

は岩本大尉の手によって、概ね時を同じうして構想が練られ、実行に移さる。そして海軍が比島で、また内地で

としておったということまさに偶然の一致とはいえ、誠に不思議に思えてならない。

戦後、特攻隊についていろいろな論評、批判がなされているが、中でも戦時中報道班員であった高木俊郎著「陸軍特別攻撃隊」の一節に、「特攻隊は志願ではなく、全く指名であった。特攻精神などというものは、事実存在しなかった。これは軍部が案出した架空の宣伝文句に過ぎない。万朵隊長岩本大尉も、富嶽隊長西尾少佐も特攻攻撃には全く反対であり、命令には服従したが憤懣やるかたなかった」と。

私はその真偽は知らない。然し、当時の第一線操縦者の心情として、特に私のように、戦闘また戦闘で、毎日の如く同僚が死んでいく、部下が置いてこない。そして自分も明日のいのちが分らない。そして出動命令が容赦なく下ってくる。こういう状況に立たされたとき、誰しも思うことは立派に死にたい、華々しく死にたい、どうせ死ぬんだつたなら男一匹デッカイ事、戦艦、航空母艦を轟沈させ歴史に名を残すような死を選びたい。これが人情ではなかるか。これは私自身だけでなく、部下にもそういう死に方をさせたい。犬死をしたくない。これが当時の私の心情だったのである。

航空特攻偶感

元連合艦隊參謀第六航空軍參謀

松浦五郎

「マリアナ諸島防衛の爲行われた」あの号作戦に於て、戦力の大部を消耗した

海軍航空部隊は、続くフィリピン作戦に於ては、残存兵力を集めて之に当らねばならなかった。既に兵力は少く、然も国防の大任を果す為に、保有兵力で最大の戦果をあげる為、止むを得ず特攻作戦が採用された。この事は特にフィリピン作戦で始つた事ではない。

海軍航空部隊は、対米作戦に対しては、異状な決意で臨んでいた。アリエーションの防空水上戦闘機がB24に対し体当り攻撃を実施したり、南東太平洋に於ける空母戦に際し、偵察機が自機の燃料残量の少いのを知り乍ら、味方攻撃隊を目標に誘導した後、燃料つきて自爆した如く、随所に決死的行動が行われていた。続く台湾沖航空戦に於ても特攻攻撃が行われた。

19年10月初旬、私がダバオから軍令部へ着任した当時、大本營陸海作戦指導部間では、次に予期される沖繩戦に於ては、航空作戦は、全面的に陸軍担当の事とし、海軍航空部隊は、次の本土戦に備える事に内定していた。

兵術の原則は兵力の集中使用に在

る。而も沖繩は航空部隊としてみれば、航空攻撃を行うには適当な間合いに在る。而も米軍が沖繩攻略の為、その周辺に拘束されている期間は、攻撃の好機である。この際陸海兩航空兵力の全力投入こそ望ましいが、実情は之に反する。

本土決戦は鏖戦り合いとなり、航空作戦実施には向かない。何とか海軍航空部隊も、沖繩戦に参加させる方法はないものかと考えた。

本土戦も近い事であり、此の際教育部隊を解散して戦力化すれば所要の兵力が得られるのではないかと思ひ、その旨意見具申をした。

慎重審議の結果、この意見が採用せられ、海軍航空部隊も沖繩戦参加の方針になった昭和20年2月中旬であった。そして第五航空艦隊は逐次増強せられ、第三航空艦隊、第十航空艦隊（教育部隊で新編）が、後詰め兵力となった。

3月1日、陸軍第六航空軍が聯合艦隊の指揮下に編入せられ、此処に陸海航空兵力が、統一指揮の下に、沖繩戦に参加の運びとなった。

海軍航空部隊は敵空母を、陸軍航空部隊は、上陸用輸送船を主目標に、作戦する事に決定した。私は聯合艦隊參謀第六航空軍參謀を拝命し、第六航空軍司令部の在る福岡へ海軍通信部隊と共に着任した。

この間海軍は航空攻撃成果の発揮の爲、陸上防衛力増強を主張したが、參謀本部宮崎第一部長の意見により、我が陸軍兵力は、島嶼防衛戦には不向きとの理由により、既に沖繩防衛軍中の一〇師団を台湾へ転出してしまつて居り、代りの一〇師団を鹿児島へ進出させたが間に合わなかった。

この問題は単に陸上戦闘の問題ではなく、成る可く長期間、敵を沖繩海上周辺に拘束して、之に攻撃を加え、多くの消耗を強いると共に、敵が陸上に飛行場を建設して、航空兵力の陸上への進出を遅らせ、作戦を有利化するにある。

然し、參謀本部作戦指導部の考えは、沖繩戦は本土決戦の前哨戦と見ていたのではないかと思われる。

この結果、嘉手納方面には、殆んど無血上陸を許し、航空攻撃の成果を低下させる結果を招来し、且陸上戦闘を不利にしたのは残念であった。3月18日米機動部隊南九州来襲、3月23日米軍機動部隊並びに艦船の沖繩攻撃開始、3月31日上陸開始となり、6月23日、第三十二軍の戦闘終結迄、陸海航空部隊の特攻攻撃は続いた。

非島沖航空戦に於ける特攻攻撃は到達率九分の一、命中率九分の一と推定される困難なものであったのに比し、沖繩戦に於ては命中率六分の一と推定

される有効なものであった。沖繩から一〇師団抽出の事がなければ、一層大きな消耗を与え、陸上戦も更に有利になつたのではないかと思われる。

海軍に於ては、沖繩戦を決戦と考えて居り、6月8日戦艦大和以下の海上特攻部隊を出撃させた。

4月下旬、連絡の爲、鹿屋第五航空艦隊司令部へ行った際、海軍航空本部囑託の水野氏に会つた。同氏は戦争終結は数カ月以内との予想を語つた。理由は特攻養成中の各基地を廻つたが、之等養成中の特攻隊員の傾付きは明るく、死相がない事は戦争の間に合わぬ事を意味し、戦争終結近しと判断するとの事であった。

8月始、私は東京へ帰つた。既に終戦聖断の時機であつたが、人事当局から海軍航空艦隊參謀予定に付8月15日第三航空艦隊へ着任せよとの命を受け終戦詔勅を木更津基地で拝聴した。長官は宇垣中将予定との事であった。本土決戦とならず終戦になつた事は日本の爲幸であつた。

今日我が国の繁栄は、之等特攻隊員の献身と、終戦により生き残つた有為の青年達の努力の賜であらう。我が国の将来を思う時、現代の繁栄を享受する青少年の教育指導こそ重大問題と思ふ。